

『緋想の天子』

『幼心地十ハフンスフィーバー!』

天界が大ナマズのせいで大地震に見舞われようとしている世界。

今は地鎮祭が行われており、歌合戦やお祭りでナマズをなだめようとしている。

テンシは自分が地上からの「成り上がり」であることに劣等感を抱いており、生粋の天人たちに認めてもらいたいがため、「世界を破壊する悪魔」と噂されているレイムに戦いを挑む。

## 『緋想の天子』

レイムたちが光琳堂を出ると、そこは雲の上だった。羽衣をまとい踊る天女。周囲は祭りの準備が行われており、せわしなく人が動いている。

いつの間にか羽衣を装備していたレイム。それに触れ、「天界ってことは、緋想天の世界ね」とささる。

とらあえす散策を始めようとしたレイム一行だったが、そこに突如呼び止める声があった。

「あなたが噂の悪魔ね!」

そう言ってレイムを指さすのは、青髪の天人。雖内テンシだ。

「このテンシが、あなたを成敗してあげるわ!」

言うやいなや要石を掲げ、襲いかかってきたテンシ。

「たいした歓迎ね!」レイムは応じると、変身して迎撃する。

そして、それを遠くから眺める白黒姿の少女。手にした銃を指先で回すと、その銃口をレイムに合わせた。

「あれが、もう一人の霊夢か」

## 【イメージ的「ユリ」OP】

戦闘シーンから【レイム対テンシ】

要石や大地を操る能力を駆使し、レイムを攻め立てるテンシ。大地を操る攻撃に対してレイムは、【】に変身し対抗する。(変身はイラスト担当と相談)

倒したテンシをどうしようかとレイムが腕を組んでいると、彼女の世話役、イクが現れた。彼女はテンシの頭を掴むと、無理矢理頭を下げさせて、一緒に謝る。

場所はテンシの自宅へ。総領が申し訳なかったと、イクはし

イム達をもてなす。お酒を飲み桃を食べ、レイムは満足した表情で、

「まあ……悪くないわね。許してあげてもいいわ」

テンシはしかし、ふて腐れた表情で縁側に座り、桃にかぶりついている。

「あなたを倒せば、私はチコからテンシになれたかもしれないの!」

彼女は地上暮らしから天人になった、「成り上がり」なのだ。それは彼女にとってコンプレックスであり、同時に他の天人に煙たがれる要因にもなっている。

テンシは世界を破壊する悪魔、と噂されていたレイムを倒すことで、皆に認められようとしていたのである。

流石に倒されるわけにはいかない。そこで他の方法を考えてくれないかとイクに言われ、もてなしに気をよくしたレイムは快諾する。

イクの話では、天界では毎年一回、大地震を止めるための地(天)鎮祭が執り行われているらしい。祭りを行うことで、ナマズをなだめるのだ。

特に音楽コンテストでは天人の証である『緋想の剣』を、一年間所有する権利を与えられる、祭のメインイベントとなっている。

狙うならそれしかない。その大会に参加することをレイムはテンシに促すが、テンシは「人前に出るのが恥ずかしい」と嫌がる。が、「認められなければ、それぐらいのやる気を見せろ」というレイムの一喝を浴び、自分を変えるため出場を決意した。

テンシは太鼓が出来ると言っ。ただ一人では心細いので、協力して欲しいとお願いをしている。

サナエは元の世界でギターをしていたと言い、アキウもキーボード(か琴とか)を弾ける。

レイムだけが何の楽器も出来ないの、サナエに教えてもらうことに。初めて優位に立てるとやる気満々で教えたサナエだったが、あつと言っ間にレイムが実力を上回ってしまい凹む(レイムの能力は『やろうと思えば何でも出来る』)

一旦休憩となり、レイム達は天界観光をすることに。途中アキウやサナエと別れ、レイムは屋台巡りを始めた。

だが、どこを見ても桃が酒しかない。その情景にため息をついていた、その時だ。

突如、目の前に黒白の衣装をまとった、金髪の少女が現れた。他の天人とは明らかに違うその容に、レイムは警戒し身構える。

「お前は、初めましてだな、レイム」

霧雨魔理沙と名乗った魔法使い。彼女はレイム達と同じように世界を回りの、様々なお宝を探して旅をしているのだ。そうだ。

魔理沙は自身と同じ白黒の銃を取り出すと、「コンテスタへの出場を辞退するようレイムに言う。自分の狙いは緋想の剣。その邪魔をするなら、力尽くまで戦場してもうとうと。」

当然拒否するレイム。それに対し魔理沙は「そうでなくっちゃな。お前の力、試させてもらおうぜ!」そう言うって変身。手にした銃でレイムに攻撃を始める。

反撃の為にレイムも変身。サイセンプッカーを構え銃撃戦となる。

「そんなもんか? おい!」魔理沙はカードを取り出すと、銃に差し込んだ。そしてトリガーを引くと、そこに現れたのはリリーホワイト(でなくてもいい)。弾幕を張られ、レイムは大きく後退。

変身、そして召喚を行った魔理沙に、レイムは「あんだ、何者なのっ?」と問いかける。それに「お前がそれを言うのかよ!」と言っていると笑うと、魔理沙は銃を構え直し、言った。

「——通のすがりの解決屋さ。覚えといていいぜ!」

## 『幼心地ナハソンスファイバー!』

銃撃戦から。【妖怪バスター】と【スプレッドスター】を撃った両者は共に被弾。「今日はこんなところか……。私の邪魔はすんなよ、レイム!」そう告げて魔理沙は撤退する。

残されたレイムは変身を解除すると、魔理沙のいた位置を見つめ呟いた。

「霧雨…魔理沙か……」

## 【OP プレー プレープレー】

雛内家に戻ったレイムは「遅いじゃない!」とテンシに愚痴られながらも練習を再開。

がしかし、夕食の時間となってしまう、イクが皆を呼びに来る。

夕食時、アしが食べたいこれは嫌いだと(桃と酒しかないのに……)イクにワガママ放題のテンシ。その姿を見て、「煙たがられているのは、成り上がりがうただけじゃないわね……」とレイムは呟き、サナエも苦笑するのみ。

けれど嫌な顔一つせずテンシの世話をするイクに、疑問を抱くアキユウ。

洗い場で夕食の片付けをしながら、なぜ彼女の為にそこまで尽くせるのか聞くと、イクは微笑んでこう言った。

「天人は世話役を道具のように扱いますが、彼女たちは自分を家族のように見てくれました。だから自分はその恩に報いたいのです」

ワガママですが、可愛らしいところもあるですよ、とそう付け加えると、再びテンシに呼ばれ洗い場を離れていった。

それを聞いていたレイムは、まとも何か言っているテンシに、笑顔で向き合うイクを見つめ、「そんなものなのかしら、ね」と漏らす。

そしてコンテスト当日。テンシ達のチームは二つ先、という位置まで来ていた。一つ前のチームは『マスター☆スパーク』、魔理沙である。

舞台裏で向き合うレイムと魔理沙。

「結局出てきたんだな。まあ、お前が出ようが出なかつても、私が勝つんだが」

たった一人が出来る、そう返すレイムに対し、「まあ見とけ!」と言って魔理沙はステージが上がっていく。

一人でステージに立つギターの魔女に、観客はどよめき出す。だが、その様子に満足したように笑って、魔理沙はスベルドライバー(銃)を取り出した。

手にしたカードは——

「ショータイムだぜっ、プリズムリバー!」

現れる三姉妹。興奮する観客。その空気をそのままに、魔理沙のギターが、『恋色マスタースパーク』が空間全てを巻き込んでいく。

「すっ……完璧に合ってますっ!」

宴会芸のために鍛えたセッションな上に、元来魔理沙が努力家なのだから当然だ。開始のパフォーマンスから観客・審査員の心を掴んだバンドは、今までで最高の歓声を受ける。

壇上から降り、レイムを見て指鉄砲の仕草をする魔理沙。

去っていく彼女を目で追って、レイムは自身のチーム。『有頂天』に向き直る。

「無理や……!」魔理沙の演奏をみたテンシは、すっかり及び腰になってしまっていた。あんな演奏を前に、付け焼き刃の自分たちが敵うわけがない。

しまいは辞退しようと言いつ出したテンシに、レイムはため息を吐くと、思い切りの胸ぐらを掴んだ。

涙目の彼女に対し、レイムは言う。

「八百万の、誰かじゃなくて！ たった一人でもあなたを見てくれる、家族に——見せてやりなさいよ！ あなたは出来るんだって、負けたりしないんだって——」

「……ひんっ」

サナエも「やはりですよ。ですって。奇跡起こしますっ」とテンパってしまっているが、それは頭を叩いて無視した。

「コンサート会場を遠くから見ろ紫。」

「このままでも良いのですけれど」

それでは面白くありませんよね、と微笑むと、傘の先で地面を突く。

すると、グラリと地面が揺れ始めた——

ステージ上がる四人。緊張しながらも演奏を始めようとした、その時だ。地面が大きく揺れ出した。ナマスが暴れたことによる大地震が始まったのだ。

逃げ出す観客。これではコンサートどころではない。

そう判断したレイムは、他の皆にも避難するよう言おうとした。

だが——

「レイム、お願い！ 続けさせて！」

大揺れのステージの上で要石太鼓にしがみつuki、テンシが言う。

視線は逃げ惑う中自分を見つめる、イクハ。

「やっさいの！ 私、ここで諦めたら、まじっで一生後悔するわ！」

その時、フックケースに反応があった。レイムがカードを取り出すと、テンシのカードが解放されている。

LFSをベルトに差し込むと、「……ちゅっとなすべったいわよ！」と返し発動した。

テンシの背中から現れた要石。それがテンシごと天に舞うとその大きさを何倍にも巨大化させる。そして、一緒に飛ばされたテンシは、その上に着地。テンシ・カナメィシがステージに突き刺さり、地震が少し和らぐへ。

「テンシ——」そう叫びレイムに呼応するゆづり、「テンシは思い切りの要石をバチで叩き始めた。その音に反比例して収まっている地震。視線を移す観客。」

立ち上がるまでになると、レイムもそれに合わせて伴奏を始めた。目配せして、セッションに加わっていくサナエ、アキユフ。

全力で要石を叩くテンシ。背中合わせにダブルギターをかき

鳴らす、レイムとサナエ。中央で音色を奏でるアキユウ。

『幼心地の有頂天』が、天界中に響き渡る。

最後の一拍で演奏が終わり、思わずその場に入り込むテンシ。そこで地震が止まっていることに初めて気づく。

同時に歓声が起こり、それに驚くテンシ。レイムはその姿に苦笑すると、サナエとアキユウ。二人とハイタッチをした。

全ての演奏が終わり、優勝者は魔理沙に。テンシは審査員特別賞ということになった。

そんなテンシの元に集まる天人達。「よかったじゃない」とレイムは言うが、テンシはそんな周囲の合間を縫って、イクの元へ。

「どうだった、私もやればできるんだから！」

興奮気味に胸を張るテンシに、思わず泣き出すイク。そんな彼女にアタフタしていると、そこへ魔理沙がやってくる。

何をしに来たのかとレイムが問うと、賞品の緋想の剣をテンシに手渡した。「実質、負けみたいなもんだからな」とそう告げて。

「ただし、今度来た時また肺抜けてたら、今度こそ緋想剣は私がかもうぜ！」

魔理沙は付け加えるように言うので、礼を言うテンシに手を振って去っていく。

「で、結局誰だったんですか、あの人……？」

事情が分かっているアキユウがレイムに聞かすが、彼女は「ただの泥棒魔女よ」と答えるのみであった。

光琳堂に戻る三人。撮ってもらった集合写真を眺めながら、

「この先もこんな異変ならいいんだけど」と言うサナエ。

暢気な彼女のため息をつきながら、写真を見てレイムも微笑む。

そして、新しいスクリーンが現れる。

霧と瓢箪、……鬼の角。

「今度の相手は、鬼ってことね——」

次の世界は、萃夢想だ。